

# しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会／浜風会会報 No.17

## 篠原の地にもあった 「避病院」

世界を震撼させた新型インフルエンザ  
昨年、豚に由来する新型インフルエンザが世界的に大流行（パンデミック）し、一時はどうなるかと、マスク、うがい、手洗いと予防にやっきになったことはまだ記憶に新しい。

辛い沈静化したが、今後共、異常気象やグローバル化の進展の影響でこうした感染症が何時大流行するかも知れない。また今、宮崎県で牛や豚の口蹄疫が異常発生した。そこで感染症に関係する篠原地区の関わりについて調べてみた。

### 「湖東伝染病隔離病舎」

今から五十年前の話である。昭和二十九年七月十九日の静岡新聞に伝染病流行の季節を迎え、隔離病舎のあまりに荒廃した姿を訴える記事があった。（略）

その対策として、篠原村、可美村、雄踏町、舞阪町、入野村、神久呂村の六ヶ町村による組合立「湖東伝染病隔離病舎」（以下避病院という）が近代的な設備で、その年の秋に篠原村に建てられた。現在の市立篠原保育園の場所である。

身近でこの「避病院」でお世話になった人が大勢いる。例えば近くの葬式料理の白和えが当たり、集団赤痢になったとか、昔はそれが法定伝染病にされていたため、隔離のため即座に入院させられた

ようだ。

その避病院に勤めておられた鈴木史ふじさんの書かれた『医療と福祉環境』よりの中の様子がわかる部分を取上げてみた。

### この避病院は十年間程度の歴史

避病院が篠原村に建設されたことで、保健所から「地元住民の反対を押し切って建設したのだから、地元の人とは特に円満にやっつけてほしい」といわれた等、鈴木夫妻の大変な苦勞があったことだろう。特に奥様のちる子さんの献身的な配慮が想像できる。やがて近所の方が、電話を借りに来る。冷たい水をもらいに来る。新鮮な野菜や魚を持ってきてくれる等地元の人々と親しく信頼される施設になっていった。患者は赤痢が多かったが、夏場には疫痢も出て、亡くなられた子供もいたとか、主治医は柳本先生で多忙の中、よく往診に来てくれたと感謝の気持ちで述べられている。

そして昭和三十四～五年頃から、ストマイ等の抗生物質が回るようになって、伝染病患者が一人もいない日が続いたことに、医療文化の発展をありがたいと感慨されていたことが印象的。

篠原村が浜松市に合併して後数年で、隔離病舎組合は解散し、避病院も解体されたようだ。

### 伝染病の歴史

伝染病予防法（明治三十年～平成十年廃止）により制定されていた法定伝染病はコレラ、赤痢、腸チフス、パラチフス、種痘、発疹チフス、日本脳炎等であったが、発病・発疹すればすぐ関係機関に届出て感染者は隔離病棟などに収容された。現在では感染症法（平成十一年）が制定されて以降、伝染病といえは家畜伝染病を指し、人の場合は感染症に改められている。

これは社会に感染者がいると伝染によって、次々と感染者が増える可能性があることから、社会的な対応が必要になり、過去、法律により隔離ということが行われていたが、患者の人権をも犯す場合もしばしばあり、改められていった結果であろう。

過去、百万人以上の死者の出た天然痘やしかしか、ペスト、スペインかぜ等、ウィルスによる人から人への感染症は恐ろしい。決して過去だけのことではなく油断できないことである。

### 平成22年度活動計画

- ★ 山下孝先生講座
- ① 平城遷都 1300 年  
奈良の文化を築いた人々
- ② インドの石窟寺院
- ★ 本年のテーマ  
昭和時代の地域歴史を掘り起こす  
「ふるさと資料室」改修
- ★ 主な自由研究
- ・七兵衛家文書より
- ・篠原地区の年表新規完成
- ・篠原地区の狛犬
- ・浜松地方の国学
- ・「寂室和尚語録」より
- ★ バス旅行／小旅行
- ① 尾張・美濃を訪ねる等
- ② 地域偉人の館を訪ねる

# 馬郡学校のこゝと

明治七年（六年説もある）馬郡学校が、舞坂小学校の分校として馬郡村、坪井村を学区として開校する。

明治八年独立校となる。

明治十七年坪井村は篠原村に合併する。

明治二十二年に馬郡村は篠原村に合併する。

明治二十五年馬郡学校は篠原学校の分校となる。

大正十五年篠原小学校が篠原東地区から現在地に移転建設に伴い、馬郡学校は、統合され閉校となる。

馬郡学校で学んだ人も現在では少なくなつた。筆者の近くに村松市郎さん（大正元年生れ）が元気で居られる。当時の学校生活の様子について伺つた。記憶に間違いがあるかも知れないが、前置きして概略次のように話された。

## 村松市郎さんの話

「学校は馬郡観音堂の裏（現在遊園地）に木造平屋建て二教室の校舎が有つた。坪井と馬郡の一年生と二年生が通学した。生徒の数は一年も二年もそれぞれ五十人ずつ位だった。先生は男の先生が二人だった。他に小使いさんとして、学校の近くのおばさんが来ていた。先生は時折り着物に袴姿の時があった。学校と観音堂の間は少し広くなつていて、体操はそこでやり、休み時間もそこで遊んだ。唱歌は先生がオルガンを弾いて生徒は大きな声で歌つた。机も腰かけも二人用で二人並んで勉強した。お昼休みになると、多くの者は家に食べへに帰つた。舞坂駅前など遠い者は弁当を持ってきていた。かすりの

着物で入学時買つてもらつたカバンを肩にかけて通つた」と市郎さんは高齢だが、眼も耳も良くはつきりした口調で話してくれた。奥さんも元気で居られる。

## 篠原小学校沿革誌より

### 学校ノ設廃分合及位置

明治七年十一月七日当篠原村百二十一番地福寿庵ナル小寺客殿ヲ借家シ僅ニ廿余名ノ生徒ヲ募集ス是レ即チ本校ノ創立ナリ夫レヨリ生徒増殖セシヲ以テ全八年十二月ニ至リ当村長福寺ニ転校・・・中略 全十三年教育令頒布ニ就キ不就学者ヲ督責セシカバ就学頓ニ増加シ加フルニ仏殿ノ教場ナル故不便勦力ラズ学務委員大ニ憂ヒ時ノ戸長ニ迫リ新築ノ件懇々協議ニ及ビ且村内人民一同ニモ協議ヲナシ鈴木琢磨氏ノ敷地ヲ寄附セラルルアリテ全十五年三月篠原村三千九百八十四番地ニ新築校堂ノ落成ヲ告ケタリ・・・以下略

## 舞坂小学校沿革誌ヨリ

### 学校ノ設廃分合及位置

明治六年六月浜松県第一大区九小区内舞坂宿仲町宝珠院ヲ以テ仮リニ校舎ニ充テ同月十九日開校ス尋テ馬郡村（坪井村合併）篠原二分校ヲ設ク（上等小学下等小学ヲ置ク）

明治八年十月分校独立シテ三校トナル

### 学校設置区域

明治六年六月舞坂小学校創立位置左ノ如シ

浜松県第一大区九小区舞坂宿 馬郡村 坪井村 長十請新田村 篠原村一宿四ヶ村聯合  
明治八年十月分校独立設置区域ヲ左ニ變更ス

舞坂宿 長十請新田村二 一校

馬郡村 坪井村二 一校

篠原村二 一校

## 静岡県教育史及び篠原村誌より

明治四年廢藩置縣により浜松県誕生。同年戸籍法（壬申戸籍）が制定された。戸籍の編成の際し、地方行政の区域単位として「区」が設けられ、大小区制が発足した。

全五年浜松県は三大区八十二小区に分けた。

第一大区 浜松外二十八小区

第二大区 見付外二十八小区

第三大区 掛川外二十六小区

全六年六月浜松県区画章程によれば  
第二百一十五号

小学広普ノタメ今般別冊ノ通中小學ノ区画相定候条左ノ章程ニ準拠シ毎区一校ヲ建設シテ子弟男女ノ別ナク六歳ヨリ必ス學業ニ就シ又可申候・・・以下略

### 第一条

学区八定ムルト離モ各區一校ノ設ハ一概ニ行届間敷候ニ付差向左ノ地所ニ学校創立可致ス

第一中学区 小学校廿八ヶ所

浜松、早出、下堀、安間、東、中田島、新橋

高塚、舞坂、新居、白須賀、新所・・・以下略

この定めにより篠原学校、馬郡学校は当初舞坂学校の分校として開校したと思われる。

# 遠州屋傳兵衛について

春日神社の石灯籠（二基のうちの西側）に、江戸小舟町の遠州屋傳兵衛名を「遠傳」と深彫りした台座が見られる。裏側には「文化五年戊辰十一月吉日」と彫っているので約二百年前に寄進されていることが分かる。

坪井の稻荷神社にも、石の鳥居の西側の柱に「文化十三年丙子十一月吉日遠州屋傳兵衛」、東側の柱には「奉献江戸小舟町尼屋傳次郎」と彫られている。春日神社より八年後に二名で寄進していたことが分かる。さらに、如意寺に保管されている六百巻の「大般若経」（文化三年に江戸の商人たちと地元や隣村の人たちにより観音堂に奉納されたもの）の中にもこの人たちの名前がある。

## 遠州屋傳兵衛について分かったこと

『江戸町人の研究 第三巻（西田松之助）』の中に、文政七年に出版された『江戸買物独案内』がある。この「案内」には商品名を「いろは順」に並べ、扱う店も並べて示している。この中に「鯉節塩干魚問屋」として傳兵衛や傳次郎名が記載されており、両名とも「濱吉組」所属となっている。

「濱吉組」については、小舟町河岸に最初に鯉節問屋が出来たのは、寛延年間（一七四八～五〇）成立の「小舟町組」があり、そこから寛

政年間に「下り鯉節問屋」として、「濱吉組」が独立したとある（『日本橋街並み商業史』白石孝著）。

「下り節」は遠州今切を境とし、志摩の国より西方の製品を「濱吉組」が荷受をし、遠江、駿河、伊豆より東を「地廻り節」として「小舟町組」が荷受をしたという。したがって、傳兵衛や傳次郎は薩摩、土佐、紀州等の「下り節」を扱う人たちであった。

「買物案内」の別の頁には、傳兵衛は「生布」「海苔」などの問屋としても記載されているので、彼は日本橋小舟町において海産物を幅広く扱っていた商人といえよう。

遠州屋傳兵衛の出自については、馬郡町の故刑部安四郎氏が書いた『引佐山徘徊（如意寺と観音堂についてまとめたもの）』の「般若経六百巻」の項の中に、先祖名や戒名をもとに詳しくかわりを追求されたものがあり、傳兵衛の先祖は馬郡村の出身者と考えてほぼ間違いないと思われる。しかし、傳兵衛の先祖が村を離れた事やその後の江戸での成功の様子については、良く分かってはいない。



馬郡町 春日神社 灯籠

江戸 遠傳 小舟町



坪井町 稻荷神社 鳥居

奉献 江戸小舟町尼屋傳次郎

文化十三年丙子十一月吉日遠州屋傳兵衛

歴史メモ 10

東海道線の今昔

会員 江間泰弘

我々の年代で最も印象的なことは、太平洋戦争であり、また戦後の生活である。この戦後、即ち約六十四年前、私は当地で一時期(約三年)を過ごし、舞阪駅から浜松まで列車通学をした。この時の思い出である東海道線の今昔について述べてみたい。

浜松市史によると、明治二十一年五月には、浜松、豊橋間の試運転が行われ、舞阪駅という名称も同年十二月には決められている。翌明治二十二年七月一日には、新橋、神戸間の時刻表まで発表され、運行されている。そして当時の報道として、京都、大阪、東京へと、旅を楽しむ

み、京都の女性は優美とか、微笑ましい情景が語られ、文明開化と喜んでい。これは現在から百三十一年前のことである。

それから六十七年後、現時点とのほぼ中間点で小生は前述のように通学していた。(昭和二十年頃)電

化されず、S Lの時代であった。このS Lはあの石炭の臭いと、独特の汽笛、蒸気の響きで示され、約二時間おきのダイヤであった。裏の畑に出れば、D 51型大型機関車にひかれた長い貨物列車が地響きをたてて、轟進していた。そして通学では弁天島駅



も整備され、十五分毎の電車が運行されている。

は舞阪駅と近いので、発車の際白い煙が上空に昇り、汽笛と共にもうすぐ舞阪駅に来ることがわかり、準備を急いだものである。この懐かしいS Lは現在でも人氣があり、鉄道マニアによって各所で被写体として求められている。

それから六十四年後の現在はどうであろうか。花博以来、舞阪駅は南北貫通の橋上駅となり、エレベーターまで付いた近代的駅舎となった。新幹線も並行し北側広場

お天王様

夏の縁日といえば八阪神社のお天王様です。7月の第一日曜日には、一家の無病を祈り、立ち並ぶ夜店を見て回り夏の夜を楽しむのです。

八阪神社は明治の神仏分離令までは牛頭天王社であったが、現在は建速須佐之男命が祀られている。牛頭天王も建速須佐之男命も疫病を防ぎ、病気を治す神としてあがめられて、村内は勿論、近郷の村や町から大勢の人たちが参拝に来ている。

神社には明治時代に役所に提出した書類が残されている。このなかで、「・・・五穀豊登悪病の撲滅を祈願すれば必ず靈驗あり、なかんずくもっとも不思議なるは字仲村の氏子百八拾余戸には悪疫の発病せしことなく、たまたま他村より悪疫に感染して戻るといへども絶えて他に伝播せしことなき・・・」と靈驗あらたかであることを示している。また「寛政初年(1789)頃浜松大工町に悪疫伝播し全町あげて本神社に祈願せしに忽ち悪病撲滅したる・・・同二年初夏本社雨覆一棟石灯笼一台の寄付あり」とも書かれている。この灯笼の一部と思われるものが境内に残されており、また大正9年(1920)に建てられた鳥居の寄付者にも浜松大工町中が見られる。

このような記録からもこの神社が疫病撲滅の神として広い地域の人たちから頼られていたことが想像できる。特に大工町の人たちは戦後まで深い繋がりを保ってきたとのことである。

また、馬郡町には津島様と言われる小さな社があり、ここも以前は牛頭天王が、現在は須佐之男命が祀られています。7月14日夜には「祇園さん」が行われます。各家から、ろうそくを持ってお参りする様は、200本の燈明が揺れる夏の風物詩です。

一時斜陽化も云々されたが、地球環境への負荷が自動車に比較し約1/9と小さく、ここへきて見直されている。

鉄道輸送は、車社会到来で

浜風会会報第17号  
 浜松市篠原公民館同好会「浜風会」  
 (篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)  
 編集委員 委員長 鈴木清  
 鈴木義雄 鈴木幹久 中山清  
 鈴木忠 山下勝彦  
 発行責任者 山下勝彦  
 発行平成22年7月1日  
 連絡先：篠原公民館気付